

作文部門 入賞作品

内閣総理大臣賞

「夏の、暑い日にぼくは見た」

鶴岡市立朝日小学校三年 伊藤浩司

「じいちゃん本当だ。花さいっだ。」

じいちゃんが大事に育てているいねが、太陽をいっぱいに浴びて、今年の夏も大きくなりました。ぼくは、なえうえのころから手伝いをして、消どくをしたり、かりとりのいねはこびをしたりしていました。

「お米って、いねの実だから、花もさぐなだぞ。見でみっが。」

そう言われたぼくは、八月の暑い、夏休みのある日、田んぼに出てみたのです。

花は、いねのほが出はじめると、先たんの方からさいていきます。いつも見なれている、いねのからが半分にわれています。(ああ、これでは、米がだめなってしまう。)

そう思いながら近づいてよく見てみると、うすい黄色の花びらが見えました。中からは、おしべやめしべも出ているようです。(花だったのか。米も、こうやって花をさかせて実っていくんだなあ。初めてじっくり見た。続けて見てみよう。) そう思って、かんさつすることにしました。



一本のほの花がさきおわるまで、三日から四日ぐらいかかります。花がおおると、それからからをとじて実り始めました。

「こうじ、これ、しぼってみれ。」

じいちゃんに言われて、みをしぼると中から、牛にゆうのようなものが出てきました。これが、だんだんかたくなって米になるのだそうです。今は、花をさかせてピン、とつぶているいねだけと、この実がみのるにつれて、つりぎおのようにたれてくるのです。

（このもみの中で、知らない間にこんなことがおきているんだ。のぞいてみたいなあ。）
と考えていると、じいちゃんが、

「これが、のりみたいになってくると、すずめが食べに来る。だから糸をはるんだぞ。」

と言いました。そうだったのか。今年は、糸はりも手つだって、実りを待とうと思います。

■山形県知事賞■

「なめたみたいなぼくの茶わん」

庄内町立余目第二小学校三年 阿部拓悠真

「ひゅうま、すごいのお、おめの茶わんだばなめたみで
いだのお。」

お母さんがごはんをたべたあとぼくの茶わんを見て言
います。

「だって、ぼく、ごはん大すきなもの。おいしい米つぶ
一つだって、もつたいたいもの。」

ぼくはごはんがとってもすきです。白いごはんも、も
ちろんすきですが、ふりかけごはんや、やきにくどん、
なつとうごはんもすきです。なつとうごばんなら、2は
いは食べられます。

だからお母さんは、ぼくのすきなごはんをいつもおい
しくたいてくれます。ごはんがたけた時に、ふたをあけ
ると、お米のつぶの一つ一つが、ぴかぴかしながら、
お米が、

「ぼくを食べてごらん。おいしいぞ。」

と言いながら、ぼくのはなに、においつきのゆげをかけ
てきます。

ぼくは、つい、そのお米をつまみぐいしたくなります。
「うまそう。早くごはんにして。」

だからぼくの茶わんには米つぶ一つのこらないのです。

ぼくの茶わんがなめたみたいにきれいなのは、もう一
つ理由があります。

二年生のべん強で、のうかの人からお米づくりについ
て教えてもらいました。その時に、

「一つぶの米でも、秋にみのつて、食べられるようにな
るためには、八十八の手間がかかっているんだよ。だか
ら米という漢字ができたんだよ。」

と聞きました。

ぼくの大すきなごはんは、一つぶ一つぶにのうかの人
の八十八の手間がかかっているのです。だから、おいし
くなると思います。

茶わんの中のごはん一つぶ一つぶが光ってぼくを見て
います。だから、今日のぼくの茶わんも、なめたみたい
につるつるです。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

「ぼくのゆめ」

高畠町立和田小学校二年 後藤 剛

ぼくは、白いごはんが大好きです。ほかほかのごはんがあれば、おかずなんてなくてもへいきです。

ぼくのおとうさんは、コシヒカリをつくっています。ぼくは、今年、タネうえを手つだいました。きかいをくるくるまわして、なえばこに土を入れてみたけど、じょうずにできませんでした。やっぱりおとうさんみたいにはいきません。

おとうさんもおかあさんも、いっしょうけんめいに米作りのしごとをしているので、ぼくたちは毎日おいしいごはんを食べられます。でも、弟たちは、ときどきごはんを食べなかつたりのこしたりします。すると、おかあさんが、

「おとうさんとおかあさんが、いっしょうけんめいにくつたんだよ。それに、ごはんを食べられなくて、こまっ

ている人もいるのに、もつたいない。」

と言います。ぼくは、米作りがたいへんなことを知っているから、そんなことはしません。

ぼくは、田んぼのしごとはまだへたくそだけど、ごはんをたくことならじしんがあります。ぼくの家は七人家族で、毎日、ぼくが八ごうをたきます。さいしよは、おかあさんに教えてもらって、こめをとぐときにこめをながしてしまったこともありました。でも、今は一人でこめとぎをして水のりようもはかれるようになりました。ぼくがたいたいごはんを、みんながおいしいと言って食べてくれることがうれしくて、毎日つづけています。ときどき水がつめたいけど、がんばってこれからもつづけていきたいです。

もつともつと、田んぼのしごとも手つだって、大きくなったら、おとうさんのようにおいしいおこめをつくりたいです。自分でつくったおこめを、自分でたいて、家ぞくに食べさせてあげる、これがぼくのゆめです。

■全国優秀賞■ ■山形県知事賞■

「お米という私達の大切な食料」

東根市立東根中部小学校五年 治部あかね

「今は昔とくらべて、食べ物がほうふになったものだ。」
お昼ごはんを食べている時、おばあちゃんがぼそつとつぶやいた。私はなんだか気になって、

「じゃ、昔はどうだったの？」
と、聞いた。すると、おばあちゃんはある一つの話をおかせてくれた。

「昔は今みたいに食べ物を食べることができなかつたんだ。とくに米はなくて、フキやかぼちゃをまぜてごはんをふやしていた。今から六十年ぐらい前、日本とアメリカが戦争をしていた頃、わかいしゅといって、六年生を卒業すると、お金でかわれて、大きな農家に働きに行っていた。」

おばあちゃんは少しだまってから、また話しました。
「ある男の子の家には、病気の母親と妹たちがいた。そ

の男の子は主人の米びつから米をぬすんでいたんだ。」
私はどきつとした。

米のない時代、ごはんも食べられない時代があったんだ。おなかいっぱいごはんを食べられる自分がどれだけ幸せなんだろうと、しみじみ思った。

いくらあやまつても、とうとうゆるしてもらえず、男の子は家を追いだされてしまったという。

私は社会の米作りの勉強で、工夫や努力をしているということを知ったけれど、昔の人の生活なんて、ぜんぜん知らなかった。

給食の時間、ごはんをへらしたり、残したりしている自分はずかしくなってきた。

私はよく、
「あかね、育ちざかりなんだから、しっかりごはんを食べなさい。」

と、お母さんから言われる。でも、すぐに、
「やだ、太るから。」

と言って、残している。

おばあちゃん達の頃は、食べたくても、食べられなかったのに、太るとか、おかずがきらいだからと言っていた

自分が、どんなにわがまま言っていたんだろうと思えた。

私は今、五年生。あの米をとってしまった男の子は当時私より一つだけ年上なだけだったのに、一家を支える大黒柱としてがんばっていた。

私は、あの男の子のように働くことはできないけれど、ごはんを残さず食べ、弟にも言い聞かせることが出来ます。自分に出来ることをして、昔の人に負けないくらい、お米を大切にしていきたいと思います。

おばあちゃんの話聞いて、自分の生活を見直すことが出来て、ほんとうによかったです。

お米という私達の大切な食料を少しでもむだにしないように、これからがんばっていききたいと思います。



■山形県農業協同組合中央会会長賞■

「父に学ぶチャレンジ米作り」

米沢市立関小学校六年 渡部 愛

私の学校では春と秋に田植えといね刈りをしています。近くの家の田んぼをかりて、毎年しています。全校生で田植えをして、五・六年生で草取りをし、秋にみんなでいね刈りをします。そのお米で十一月にもちつきをします。きねを持って、みんなでついたおもちはとてもおいしいです。

この活動をしてきて、疑問に思ったことは、田植えといね刈りの間、何をしているかです。草取りの他に何をしているのかなと思いました。

私の家は農家でお米を作っています。父は、水の管理や、消毒をしています。父が、一番気をつけているのが農薬をあまり使わないことです。父は、人間の体にえいきょうのある農薬をできるだけ少なくして、食べた人が、「おいしい」と思えるお米を作りたいそうです。私は、

すごいなと思いました。でも、お米を作っている時の父は、時々なやんでいます。無農薬米を作るのが大変だからです。たくさんなやんでいろいろな方法をためしています。祖父は、

「長年の経験からして、こっちの方がいいぞ。」と、言いますが、父は、

「いいよ。オレ、いろいろチャレンジしてみんなだよ。そうしたら、親父よりいい方法が見つかるかもしれないからな。」

と、言います。なやみながら、いろいろチャレンジする父はすごいと思います。でも、私は、失敗したらどうするんだろうと少し心配になります。しかし、父は、失敗をこわがらず、次はどうしようかと考えます。私は、難しいことをやるとき、失敗することがこわくて、自分からやるぞという気持ちになれないことがあります。でも、父は、失敗しても立ち上がります。そして、成功したときは、すごくうれしそうな顔をします。私までうれしくなります。

正直に言うと、父は、どんな仕事の時よりも、米作りをしている方が笑顔が多くて、とてもキラキラかがやい

て見えます。私もあんなふうキラキラかがやく人になりたいです。失敗をおそれず、いろいろなことにチャレンジできる人になりたいです。父を目指す事が私の目標です。

私が大人になったら、できるかどうかわかりませんが、米作りをしたいと思います。父に少し教えてもらうだけで、あとは私一人で一からやるつもりです。女だからできないなんてあきらめません。精一ぱいがんばって、時には、父に助けてもらいながらやっていきます。そして、いつか父以上のおいしいお米を作ってみせます。私は、米作りに終わりは無いと思います。父のように毎年毎年工夫を加えて、だれにでも“おいしい”と思われるような、そして安全なお米を作りつづけていきたいと思いません。



■全国優秀賞■ ■山形県知事賞■

「私の目標」

鶴岡市立朝日中学校三年 齋藤 那千

「あつ、今日のごはんはちよつと固いなあ。」「よし。今日はおいしくたけた。」これは、毎朝私がごはんを食べた時に思うことです。

私の家は農家ではありません。ですが我が家の家族はお米が大好きです。ほぼ毎日3食白米におみそ汁がつく、和食派でもあります。そのお米が大好きで、味にも少しうるさい家族の中で、私がお米を炊くのをまかされるようになったのは、中学二年の夏休みからでした。

きつかけは私の料理好きな性格でした。食べるのも好きだけど、作るのもっと好き。そんな私が台所に立つ日はめずらしくありません。その日も、「お昼、何たべっかなあー。」と考えながら台所でブラブラしていると、祖母に、

「那千、米炊いでくれっちゃー。」

といわれました。その時の私の第一声は、

「えー。めんどくせーし。」

というもの。「料理好き」とはいうものの、めんどくさいことは嫌いな私。「米をとぐ」という作業は、今までの祖母を見ていても、何回も水を捨て、またとき、水を捨てるという単調な事の繰り返し。私には無理。と思っていた事の一つでもありました。その時も断わろう、と思っていたのですが、私がひまなこともあり、その日のお米は、すべて私が炊くことになってしまいました。さすがに自分でも、「できつかなあ。」という不安もありましたが、とりあえず、やってみることにしました。

戸惑いながらも計量カップでお米の量を計り、ボウルに入れた炊く前のお米は初めて見る物のように感じました。毎日自分の目で見て、自分の手で自分の口にはこぶ「ご飯」としてのお米と、今、目の前にある「白米」という姿のお米。同じものはずなのに、自分の目に映るのは全く違うモノ。「これが、なんであんなになんや。」という疑問が私の頭の中にありました。とりあえず、お米をとき始めた私。あの祖母がやっていた単調な作業です。しかし、この目で見たお米の変化は、私をとても

驚かせました。あきらかに色がとぐ前と違うのです。これは実際にやった人にしかわかりません。厳密には色ではなく、お米の透度が違うのです。最初はにごった白色なのに、といで水を捨てるごとに色がうすくなり、透明感が出てくるのです。それが色の違いのようにはつきりしているから驚きです。それを見た私は、「楽しい!!」という気持ちになりました。その日からお米をとぐのは私の担当です。

自分が嫌だと思っていたことが、楽しいと感じられるようになることは、とても大きな変化です。私にその変化を気付かせてくれたのは祖母と「お米」です。今の私があるのは、この2つがあるからであり、これからの私を作っていくのは、私自身と、これまでの私。その中にある「お米」という大切な一つの存在を感じながら、生きていけることは、最高に幸せなのだということを、私自身かみしめて、私を生長させていく。これが今の私の目標です。この目標を達成できた時、私は今よりもっと「お米」を大切にしていって、おいしく食べられることでしょう。自分自身を生長させてくれるもと「お米」に感謝して、これからの「私」をつくっていききたいと思えます。



■山形県農業協同組合中央会会長賞■

「あつたかいごはん」

山形市立山寺中学校一年 佐藤 麻衣

「やっぱり、おいしいなあ。」

私は、家のご飯を食べながら、いつもこう思う。

私の家のお米は、母の実家の祖父と祖母が作ってくれているのを食べている。祖父母が作ってくれるお米は、炊くと真っ白なご飯からほわつとあつたかい湯気が出てきて、食べるとほのかな甘みがあつて、とってもおいしい。私はこんなにおいしいお米が食べられて本当に幸せだと思う。

私の祖父母は、西川町に住んでいる。祖父母の田んぼは、一等地というお米が一番おいしく作れる場所にある。私もそこを見たことがあるが、田んぼの緑がとても美しく、印象深い所だ。

祖父母の田んぼは、一等地と言っても、土地がわずかなしかなく、米作りだけでは、生活が苦しかったと言う。

そこで、田んぼだけではなく、さくらんぼなどの果樹作りや、土木工事をして生活していたそうだった。

しかし、長年の無理がたたたり、祖父が、股関節を痛め、入院。股関節を人工股関節にした。そして、そのすぐ後、腎臓に癌が発見され、また入院することになった。まだ小さく、病気のことをよく知らなかった私は、

「大丈夫。」

と、ただ声をかけてあげるしかなかった。そう言うのと、祖父はいつも

「大丈夫だ、元気だよ。」

と、笑顔で答えてくれていた。そして、その言葉を聞いて、私は心のどこかでいつも安心していったのだ。

祖父は、リハビリのかいあつて、無事に退院することが出来た。しかし、退院出来たは良いものの、前のように働けなくなり、土木工事やめ、米作りもしにくくなった。祖母も膝を痛めていたため、二人での米作りは、とても難しくなったのだ。

私は、二人はもう米作りや畑仕事をやめるんだと思っていた。体がついていけないのに、力仕事をするのは簡単なことではないからだ。しかし、祖父母は米作りをや

めなかった。やめないとと言っても、機械を使ったり近所の人たちに手伝ってもらったりして、米作りを続けている。私は、このことを聞いた時、祖父母の強い心に感動した。

ある時、母がこんなことを言った。

「もし、おじいちゃんとおばあちゃんが田んぼ、出来なくなったらどうしようね……。」「
本当にそうだなと私は思った。

私がいつも食べているおいしいご飯。それは、祖父母の大変な苦勞から出来ている。この、いつものご飯が食べられなくなってしまったら……。

私には、この米作りはとても出来ないと思う。米は多くの経験と体力がなければ、大変なことだと、祖父母の経験から知ったからだ。私の家に分けてくれているお米も、家にやらないで、他の所に売ってしまえば高く売れるのになと思うと、祖父と祖母の真心が、ものすごく温かく感じられた。

今、私に出来ることは、祖父と祖母を手伝ってあげること、そして、「ありがとう」と言ってお礼をすることだと思う。おいしいお米をくれる、祖父と祖母へ。

「いただきます。」

今も、私はご飯を食べる。おじいちゃんとおばあちゃんの心のこもった、「あつたかいごはん」を。

